

## 樽一物語 創業から発展期へ～その8 銀座店開店と各地の銘酒

「樽一」はかつて実は銀座にもあった。昭和56年、銀座6丁目、当時あった松坂屋デパート（今は「銀座シックス」となっている）と昭和通りの間にあるビルの地下1階に開店した。

佐藤孝はこれまでの「樽一」とは一味違う店を目指すこととした。イワシ料理の店として、「真いわし」より小さい「しこいわし」をメインに、いわし懐石料理、いわしの踊り食いなど、東京にはあまりなかった目新しい料理を用意した。店内には、しこいわしが元気に泳ぐ水槽を設け、楽しさも演出した。当時いわしが健康食として注目を浴びていたこともあり、水産を学んできた佐藤孝はいわし料理に挑戦したかったようである。銀座にしては安い値段設定にし、新橋も近く、サラリーマンが気楽に銀座で楽しめる店を目指した。酒はもちろん浦霞を全面に押し出し、当時評価が高まっていた浦霞の全銘柄を取りそろえた。

ただ、全国各地から様々な地酒が東京でも飲めるようになり、各地の銘酒が飲めることを売りにする居酒屋が爆発的に増えてきていた。焼酎ブームもあり、お客様から“いろんな酒を飲んでみたい”という要望も増えていった。佐藤孝は浦霞の蔵元が上京した折に、「各地の地酒を置くわけにはいかないだろうか」と願い出た。蔵元は二つ返事で承諾したが、一つ条件があった。「できるだけ良い酒のみを置くように。」

浦霞蔵元の快諾により浦霞一途であった「樽一」に大きな転換期が訪れた。浦霞と各地の銘酒、これをどのように表現、演出すべきかが「樽一」のあらたな使命となった。